

秋葉 淳・橋本伸也編

## 『近代・イスラームの教育社会史』

——オスマン帝国からの展望——

(叢書・比較教育社会史)

昭和堂 二〇一四・一一刊  
A5 三二〇頁 四二〇〇円

「近代帝国としてのオスマン帝国」は、ムスリムが過半を占める唯一の大国でありながら、非ムスリムの活発な活動も見られたことにより世界史上に特徴的な地位を占めている。本書は昭和堂の「叢書・比較教育社会史」の一冊として、オスマン帝国のカーデー研究の第一人者である秋葉淳氏・本叢書に関わりの深い橋本伸也氏を編者に刊行された。三部十章からなり、いずれもオスマン帝国とその周辺地域の教育環境の変化に着目しながら、時代・地域を超えた連動性について考察することが目標とされている。

【イスラームの近代—知の伝統と変革】秋葉「伝統教育」の持続と変容—一九世紀オスマン帝国におけるマクタブとマドラサ」、高橋圭「スーフィズムの知と実践の変容—エジプトの事例から」を収録する第一部では、前者が旧来の教育機関であるマクタブやマドラサ、後者が信仰における内面的実践や直観的体験を重視したスーフィズムを中心に、それぞれの社会における役割が社会自体の変化に対応して見直された点を明らかにする。

【一九世紀オスマン帝国の改革と展開—変容する知識空間と社会構造】第二部では、秋葉「オスマン帝国の新しい学校」で新式学校の設立について概括した後、佐々木紳「ジャーナリズムの登場と読者層の形成—オスマン近代の経験から」が言論の基盤となる新聞とそれを取り巻く環境について明らかにする。上野雅由樹「アルメニア人オスマン官僚の教育的背景」はオスマン帝国の公学校・様々な宗教共同体の学校・外国の学校を取捨選択し官途を目指したアルメニア人の姿を検討し、小笠原弘幸「歴史教科書に見る近代オスマン帝国の自画像」は教科書の構成から歴史叙述の変化について述べる。

【接続する帝国、交錯するネットワーク】磯貝真澄「ロシア帝国ヴォルガ・ウラル地域ムスリム社会の「新方式」の教育課程」、米岡大輔「ハプスブルクとオスマンの間で—ボスニアの「進歩的ムスリム」による教育改革論」の二つの章では隣接地域の変化として、前者がオスマン帝国の教育改革の影響を受けつつ複雑な状況下で教育改革を行ったロシア・ムスリムに、後者がロシア・ムスリムの事例を参照しつつ教育改革とムスリム「民族」創造に努めたボスニアの進歩的ムスリムの活動に着目している。藤波伸嘉「帝国のメディア—専制、革命、立憲政」は様々な言語で帝国内外に展開した言論活動がいかに相互に関連しあっていたかを描き出し、ムスリム・トルコ人中心の記述に陥りがちなオスマン帝国の多元的側面に光を当てている。

橋本「オスマン・ハプスブルク・ロシア—帝国空間における知と学校の比較社会文化史への射程」は終章として「西欧化」や「後進性」

という言葉では回収しきれない、非西欧地域の人々による近代化への挑戦・応答を検討する意義について説いている。本邦初の近代中東・イスラーム地域の教育社会史・文化史の専著である本書は、広く多様な世界に興味を持つ全ての人に有意義な著書となっている。

(永島 育)